

## 事例2 社会的処方を手がかりにしたリンクワーカーを活用した地域づくり

### ●主な事業主体、連携主体

事業主体：名張市福祉子ども部地域包括支援センター  
（「まちの保健室」との一体的活動）

連携主体：地域づくり組織、民生委員・児童委員、ボランティア団体 等  
名賀医師会、伊賀薬剤師会等「在宅医療・介護支援連携機関」  
名張市社会福祉協議会 等

### ●現状、課題

地域共生社会の実現に向け、名張市では、“つながり”“連携”を重視したさまざまな取組を進めてきました。

急速な高齢化、複雑で多分野にまたがる困難を抱える事例が増えるなかで、制度の隙間で埋もれる方々を包括的な支援につなぐために、保健・医療・介護・福祉等、さまざまな分野を越え、専門職や地域住民が共にのりしろを伸ばすようなつながりづくりが今後ますます必要となります。

住民主体の地域づくり活動、地域の身近な総合相談の窓口「まちの保健室」を土台とし、多機関協働のつながりのネットワーク「名張市地域福祉教育総合支援ネットワーク」など、さまざまなつながりの仕組みの連携強化が求められます。人間中心性・エンパワメント・共創という「社会的処方」の理念を手がかりに、つながりの深化・発展に向けた活動に取り組みました。

### ●取組概要

社会的リスクを背景に持ち、健康課題を抱える市民を地域の支援機関へつなぎ、かかりつけ医、保健師、ソーシャルワーカー、相談支援包括化推進員、生活支援コーディネーター等の専門職が、地域住民、ボランティア、行政等が連携しながら、地域資源（通いの場等）を開発・活用するなどして健康面と社会生活面の支援を一体的に実施する「社会的処方」を手がかりにした仕組みの構築に向けた体制整備・人材育成などを進めています。

社会的処方の取組は、下記のモデル事業を受託・活用しながら実践を重ねました。

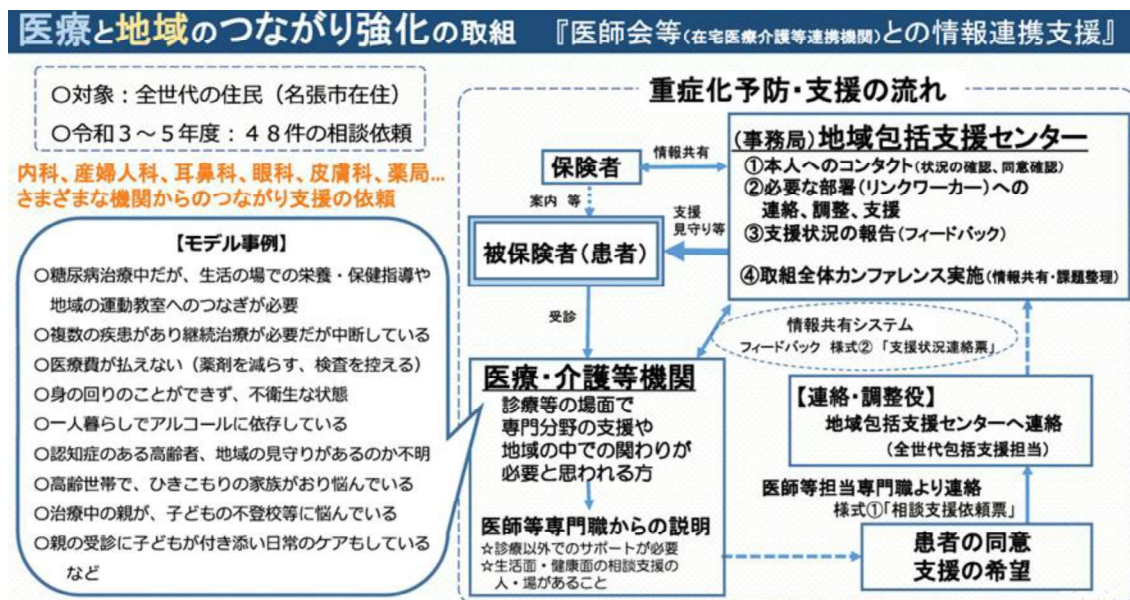
◇令和2・3(2020・2021)年度：三重県「地域資源コーディネート機能強化事業」

◇令和3・4・5(2021・2022・2023)年度：

厚生労働省保険局「保険者とかかりつけ医等の協働による加入者の予防健康づくり事業(モデル事業)」

## ○「つながりサポート～名賀医師会等との情報連携支援」

社会生活面において支援が必要ではないかと思われる方を、医師や薬剤師等の関係機関から、地域包括支援センターに情報をつなぐことで、その方が必要とする公的な制度につないだり、また地域の中でのつながりづくりの活動などの支援に展開しています。



## ○地域住民を対象としたリンクワーカー養成の取組事例

リンクワーカー養成では、「社会的処方」の理念やリンクワーカーの概念、社会的背景の理解を深めるための講義・事例検討・ワークショップ等の実践的な活動を組み合わせ、地域共生社会や地域包括ケアシステムの実践を進めるための人材育成に取り組んでいます。

名張市では、専門職だけでなく、地域住民を対象とした活動に共に取り組むことで、双方につながりを創る人材として育ちあう取組としています。

### 『ステイホームダイアリー』

交換日記を活用した新たなつながりづくりに取り組んでいます。高校生、大学生、ボランティアの皆さん、子育て世代、休学、休職中の皆さん等対象者を限定せずにお声がけをおこない、3人一組で交換日記を回してもらいます。交換日記は、地域包括支援センターやまちの保健室職員からの声かけで参加する人が多いですが、一度参加した人が、次の年には興味を持ちそうな人を誘い、その人がまた誘うといった口コミでの参加もあります。中には、参加者がSNSにあげた「参加してみますー！」の投稿に反応して申し込みをする人もいました。交換日記の受け渡しは、住んでいる地域のまちの保健室でします。交換日記は、職員も見るということを前提としていますので、交換日記を介して、書かれたことについて対話が弾み、関係構築にもつながっています。

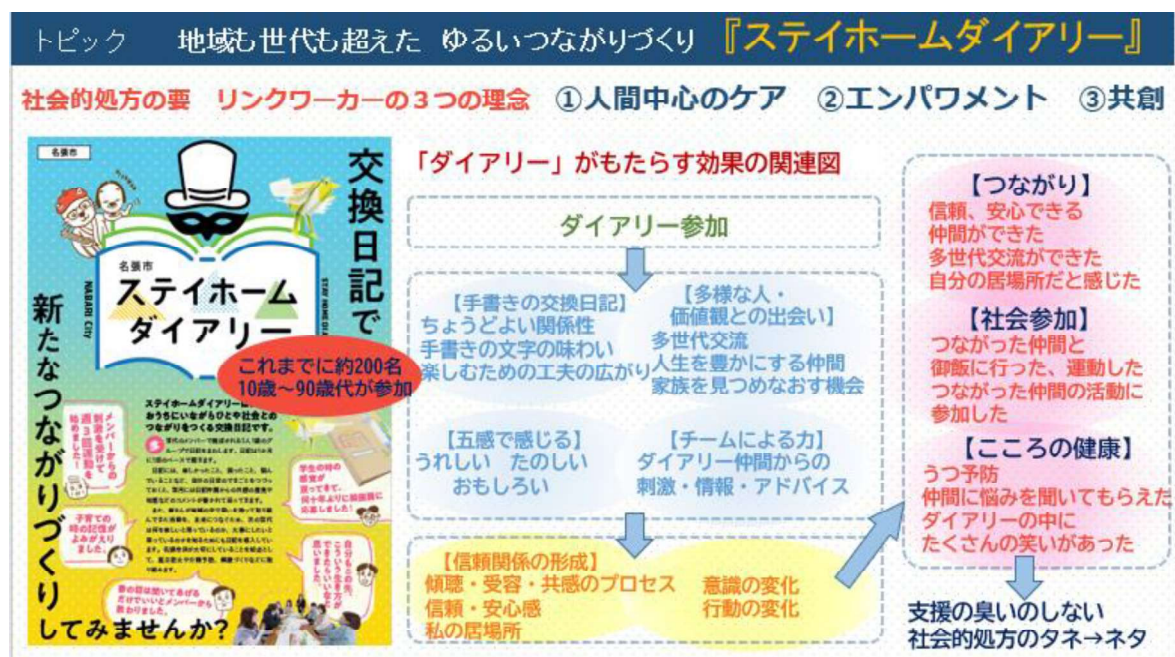
SNS でのコミュニケーションが増える中、あえて手書きにすることで、自身を振り返る機会となり、またさまざまな価値観や多様性に触れ、仲間とのつながりの中で自己肯定感が高まり、意識変容・行動変容などの変化が生まれて、つながりの効果が広がっています。

下記は、参加した人の変化や活動の広がりの一例です。

- ひきこもり状態だった 20 代男性:ダイアリー仲間が出演するという演奏会に、手土産をもって応援にお出かけ！
- 失業中の50代男性:就労活動をはじめ、仕事が決まると嬉しそうに知らせてくれる！
- 不登校の子の育児で悩んでいた40代女性:不登校の子や親の居場所をつくりたいと書き綴り、ダイアリー仲間に「それイイね！！」と励まされ、実際に居場所づくりの活動が始まった！
- 不登校状態だった中学3年生の女性:高齢の医師と地域ボランティア女性との3人一組。人生の先輩との交流を通じて、心理学を学びたいという意欲が湧いてきて、定時制高校を受験し、楽しく通い始めた！

書き綴られた日記から、専門職は社会的処方タネ(地域の面白いネタ)を収集し、まち歩きをしたり、さまざまな人が活用できるようマッピング(可視化ツール作成)を行い、地域資源の見える化と創出につなげています。

このプロセスを踏みながら、「つながりづくり」「社会参加」「こころの健康づくり」につながり、地域をつなぐ活動に取り組む人材(リンクワーカー)を育成します。



●取組におけるポイント

「社会的処方」という新しいワードへの抵抗や、縦割りの事業として存在していない取組であるがゆえの展開の難しさ、理念や実践の理解を得るための説明などにも苦労しました。

「社会的処方」は特別な取組ということではなく、どの事業にも共通する大事な視点があり、つながりによる地域の元気づくり、予防的な地域づくりにつながる活動であるというシンプルなメッセージとすることが大事であると考えています。また、分野・職種・地域を越えて、専門職も地域住民も、共に支え合い、面白さのある自由度の高い活動であることが大切であると考えています。

●今後の展開について

令和2(2020)年度から5(2023)年度までは、三重県や厚生労働省のモデル事業を活用した展開としていましたが、令和6(2024)年度からは「重層的支援体制整備事業」や「一般介護予防事業」等で全ての取組を継続実施しています。

「本人の願いや希望を活動の起点にすること」

「その活動を通じて関わる者同士がエンパワーされていくこと」

「支援する側・される側の垣根を越えて、活動を共に創っていくこと」

この社会的処方の3つの理念は、日常の業務に追われ、大事な観点を見落としがちになる行政や専門職にとって錆びついたセンスを磨きなおす機会にもなります。今後も「社会的処方」を手がかりに、分野を横串に刺して、各々ののりしろを広げるようなつながりの実践を重ねていきたいと考えています。

●本事例に関するお問い合わせ先

名張市福祉子ども部地域包括支援センター

電話番号:0595-63-7833

メールアドレス:hokatsu-c@city.nabari.lg.jp